

## 38 訴人婆さん

伝承地：今泉町1013



(興禅寺)

この話を掲載することにする。

参考書籍：4・6・8・10・18-20

宇都宮8代城主の宇都宮貞綱うつみやのさだつなという人の建てた寺に興禅寺こうぜんじがある。この寺の一角に薬師堂があり、その中に、舌をくぎで打ちつけられたばあさんの形をした石碑がおかれていた。この石碑には、二つの言い伝えが残されている。一つは、梶原景時かひはらかげときの末っ子菊寿丸きくすけまるにかかわるもので、もう一つは、今泉但馬守いまづみたにまのりの一子宗高いちむねたかにかかわるものであるが、二つの話は、登場人物、時代背景が違うだけで筋書きは、ほぼ同じなのでここでは、菊寿丸に関する

源平の戦いがはげしかったころの話です。源氏の大将源頼朝げんらいちかおにつかえて手がらのあった武士に梶原景時という人がいました。景時は、仲間の武士たちと意見が対立したために、鎌倉を追われ京都に向かいました。ところが、駿河の国すまがはのくに（静岡県）の清見きよみが関あたりで、景時に反対する人々と戦いとなり一族の人々は、ほとんど戦死してしまいました。しかし、景時の末っ子の菊寿丸だけは難をのがれることができました。その菊寿丸は、二人の家来に守られて奥州におちのびることになりました。時は、正治元年（1199）の暮れ、一行三人は、疲れた足をひきずるようにして、田川のほとりにある興禅寺の門前にやってきました。門前で働いている婆さんに、わけあって追われている身なので、しばらくどこかへかくまって欲しいと金貨を出して頼みました。婆さんは、薬師堂の天井裏にかくれることを教えてくれました。まもなくそこへ、馬に乗った10人ばかりの武士が現われ、興禅寺のなかをくまなくさがしましたが、みつけることはできません。門前で働いている婆さんにたずねましたが、「知らぬ」の一点張りです。そこで、追手の頭は、たくさん金貨と交換に居所を数えてくれるようにたのみました。欲の深い婆さんは、お金に目がくらみついに3人の隠れている所を教えたのです。菊寿丸たちは、薬師堂からひき出され、あつあつらしい武士たちにひきすえられて、その場で首を落とされてしまいました。見ていた人々は、あわれな菊寿丸に同情して涙をながし、あまりにも欲深いなまけ知らずの婆さんを憎みました。この事件が宇都宮の城主の耳にはいり、婆さんは日ごろのあくどい所業が調べられた上、打首にされました。その上に婆さんの強欲さや冷酷さ、舌先三寸のおしゃべりがとがめられて、舌に五寸ぎを打ちこまれた婆さんの姿の石碑がつくられ、薬師堂の中に置くことになりました。そして、これは、訴人婆さんの碑として、城下の人々にうそをついてはいけないという深い教訓となり、次のような歌が伝えられています。

訴人した姥うばもろともに嘘つかば、舌へはくぎをうつのみやのみ、

